



TITLE:

第347回京都外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第347回京都外科集談会. 日本外科宝函 1958, 27(5): 1293-1294

ISSUE DATE:

1958-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206670>

RIGHT:

第 347 回 京 都 外 科 集 談 会

昭和 33 年 5 月 28 日

(1) 異所性に発生せる乳癌と考えられた
1 例

外科 1 芳村 勝夫

両腋窩及び左前胸壁の無痛性腫瘤を主訴とせる、68才の女子に対して左腋窩腫瘤の試験的切除を行い、病理組織学的に検索した結果、単純癌の像が見られ乳癌転移が疑われた。乳房には外部より何等の異常所見が認められなかつたが、かゝる症例に対する従来の報告は全て乳房切断術を行うべき事に一致しているので、これにしたがつて本症例に対しても左乳房切断術ならびに両側腋窩廓清術を施行した。その結果、両側腋窩及び胸骨左縁より示指頭大〜クルミ大の弾性硬、剖面暗灰色の腫瘤数コを得、又大胸筋の下で略々左乳嚢線上第5肋骨部に5×3×0.5cmの扁平な腫瘤を得た。組織所見としては腋窩及び胸骨縁の腫瘤は単純癌の像で何れも Krebsnester を著明に形成して居り、大胸筋の下で腫瘤も同様単純癌であるが腫瘍細胞と結締組織が混在して Nester を作っていない。乳腺は組織学的に軽度の Mastopathie 様の変化が見られる程度で肉眼的には何等の異常所見はなかつた。以上の結果、大胸筋下の腫瘤は元は副乳腺だつたのではなからうかと思われ、こゝに異所性に発生せる乳癌が腋窩その他のリンパ節に転移を来したものであらうと考えた。

(2) 頬部 Lymphosarcoma の 1 例

外科 1 カルロス ラミロ ロドリゲス

頬部の Corpus adiposum buccae に含まれている幼若リンパ節より発生せると思われる極めて稀な Lymphosarcoma Lymphocytic Type の 1 例について報告した。頬部にはリンパ節が存在しない所で Lymphosarcoma の発生は考えられないのであるが最近木原一派は従来のリンパ節より小さく肉眼的には認めがたい二次結節形成及び辺縁洞形成の弱い幼若リンパ節が身体の各部特に脂肪組織の発達している所に見出した。頬部には Corpus adiposum buccae がありこの中にも幼若リンパ節が存在することもあるので之より発生した Lymphosarcoma と考えられる。世界にも珍しい 1 例である。

(3) 16年を経過して再発を見たアダマンチノームの 1 例

外科 2 劉 楓橋

16年を経過して再発を見た下顎部の珪瑯腫の 1 例を経験したので報告した。

患者は47才の男子で昭和16年10月に本外科で珪瑯腫の診断で左下顎骨の部分切除を併せて珪瑯腫の剔出術を受けた。その後何らの症状も認めず経過していたが約3年前より、左下顎部に無痛性腫瘤、鳩卵大のものが認められる様になり、年に1〜2回穿刺を受けてい

たが消失せず再び本科を訪れたものである。入院時の診断は唾液腺嚢腫で手術の結果得られた標本は組織学的に珪瑯腫であつた。16年前に顎骨切除を含めて行われた剔出部位に再発を認めたもので、この症例で再発の基本となつたものは何ものであるかが問題であらう。下顎骨の部分切除をする際に顕微鏡的の腫瘍細胞が局所組織内にこぼれ落ちて生長したものか、或いは下顎骨内に発生したものとは全く関係なく骨以外にこのような Keim が迷入してそれが發育したものか、など色々考えられるが果してどのようなものであるうか。

(4) 異型血輪血による無尿の 1 例

外科 2

神藤昭男 中村正則 伏木信夫

25才女子で腹部神経症の診断の下に開腹術を施行した際、誤つてB型患者にA型保存血を1325ccの大量輸血し、典型的な溶血性ショックと思われる症状とそれに続いて7日間の無尿症を来したがさいわい一命を救い得た1例を報告した。ショックによる低血圧状態は術中より15時間の長時間に亘つて持続し、血圧上昇剤強心剤等凡ゆる手段をつくしたが何れも無効であつた。尿毒症の発症をおそれ、出来るだけ侵襲を加えないで専ら補液に注意した。唯、術後4日目に腹膜灌流をして血清中の残余窒素の中等度減少を認め有効であつたと考えられるが尚不充分で、人工腎臓の応用が望まれる。

(5) 骨関節結核病巣内のストレプトマイシン濃度分布に関する研究—第3報—

整形 近藤 茂

演者は骨関節結核冷膿(A)及び膿清(B)の等量系列に、同一濃度となる様 SM を添加し、両系列を1時間及び24時間、37度に保つた後、SM の濃度変化を測定した(1時間群6例、24時間群9例)。乾酪性物質が SM を破壊するなら A 系列は B 系列より低濃度を示し、24時間値では、A 系列は更に長時間破壊を受けるため、1時間値より差が益々大となる筈であるが、実測値はその反対であつた。此は SM が乾酪性物質により破壊されるのではなく、その内部へ滲透するのが困難な故と考えられる。さて、本研究第2報で、生体血行から隔絶した骨関節病巣には SM が滲透し難いことを報告したが、本測定値は第2報の臨床実験をよく裏書きしている。同時に病巣廓清術に重要な示唆を示すものと考えられる。

尚、本実験が抗結核剤の病巣内滲透性を、in vitro で測定し得ることを暗示している面からも、その重要性を強調したい。

(7) キルシュナー鋼線による下顎骨折の

2 治験例

大和高田市氏病院 杉本 雄三
外科2 劉 楓橋

右下顎隅角部骨折に対して、観血的に銀線縫合固定を行ったが、縫合がゆるく困り果てた挙句、キルシュナー鋼線を髓内に刺し込んだ所、意外にも充分な固定が得られ、為に早期に歯牙固定を除去して、患者に苦痛を与えず、且普通食を摂らしめた。この経験により、同様第2症例に対して、キルシュナー鋼線を2方向から刺入する事によつて固定を充分にし、歯牙固定は初めから施行せず良好な結果を得た。下顎骨折に対しては従来一般に非観血的に歯牙固定法が貴用され、実績を挙げているが、抗生物質の発達と相俟つて、われわれの方向は簡単に強固な固定が得られ、歯牙固定を廃して患者から苦痛を除くことが出来る。良き歯科医の協力が期待出来ない一線外科医、歯牙欠損の老人等にとつて本例は一応試みて良い方法ではあるまいか。併し歯根部損傷による歯牙の脱落、下顎管の損傷による副作用なぞ一応考慮せられ、症例を重ねて種々検討したい。新しい方法として御追試を乞う。

(8) 下顎骨欠損に対する骨移植術及び顎関節形成術の経験例

玉造整形 清家 隆介

下顎骨に対し骨移植術と顎関節形成術とを併用した例は文献的に極めて稀である。珐瑯上皮腫の為に某院にて左第2小臼歯部より左顎関節部に至る下顎骨切除術をうけた後、顔面非対称性と開口及び咀嚼障害を訴

えて来院した26才女性に12cm×3cmの長大なる腸骨移植術と顎関節形成術とを併用し極めて良好なる結果を得た手術例を経験した。開口及び咀嚼運動に際して下顎体を後方からさへる下顎枝は両側とも必要である。特に下顎骨移植術に際しては、術後の顎強直を防ぐ為には移植床と移植骨との接合面を特殊に細工し、その密着接合を強固に保たせた上、比較的早期より開口運動を開始する必要がある。

質問

関節部移植骨頭に何等か特別の操作を加えられたのですか。

答

anatomisch physiologisch に存在する Meniscus が残存していたので移植骨の関節端を契状としてこの Meniscus をこの中にはさみ込み新関節を形成致しました。

(9) 脊髄癆性脊椎症の1例

整形 斎藤 肇

脊髄癆性脊椎症に対する観血的侵襲例は本邦に於て未だ3例を見るに過ぎない。私は本症に対し椎弓切除術を施行し、本症特有の所見たる脊椎関節軟骨の消失、脊椎関節周囲の軟骨化、石灰化骨化等の異常増殖変化を肉眼的組織学的に確認する機会を得たので術前のレ線所見、ミエログラフィー所見、一般検査所見を付記して報告致しました。尚本症例は以上の所見を総括して Brailsford に依る脊髄癆性脊椎関節症(第3期)増殖期に属するものと推定致しました。